

家族崩壊と子どもの自己呈示に関する研究

田中, 理絵
日本学術振興会特別研究員 : 地域教育社会学

<https://doi.org/10.15017/978>

出版情報 : 大学院教育学研究紀要. 3, pp.65-78, 2001-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン :
権利関係 :

家族崩壊と子どもの自己呈示に関する研究

田 中 理 絵

「子どもが親がいないというのと、大人が親がいないというのと全然違う。大人に対して『うわあ、親がいないのか』とか思わないやん。子どもだと思っやん。大人だったら、『親、もういないんですよ。きょうだいで頑張っって』とか言っって。そうやっって言えるけど。」
(本研究インタビュー調査による口述より：事例 i)

1 はじめに

子どもにとって、家族を失うこと、あるいは、親をもたないということの社会的意味は非常に深刻である。それはまず、生活・経済基盤の弱化・喪失を意味し、次に、社会的地位の劣化・喪失を意味する。前者の喪失は、社会的福祉施設／サービスなどの家族の代替機関によってフォローされるが、後者の喪失を補填するものはなく、家族を失った／親をもたない子どもは、まさにそのことによって社会的な信用を剥奪され、劣位におかれることがある。また、前者の喪失は日常生活全般にわたって常時感じる困難であるという性質をもつものに対して、後者の喪失は、対人場面において他者から「家族崩壊下の子ども」⁽¹⁾というレッテルを貼られるときにのみ生じるという点で性質を異にする。

多くの場合、このレッテルの性質は、それを貼られた当事者にとっては不当とを感じるものであり、社会的地位の喪失という窮地に追いやるものである。したがって、当人にとって、こうしたレッテル貼りを回避することは非常に重要な関心事となり、そのため、「親と暮らしていない子どもである」(=「家族崩壊下の子ども」)という自己に関する情報について、さまざまな呈示方法を企図することとなる。

本研究では、こうした「家族崩壊下の子ども」が、他者との相互行為場面において、その状況をどのように管理しようと画策して、自己にとってどのような行為選択が適当であると考えているのかについて、自己呈示における情報管理の戦略という視点から明らかにすることを目的とする。言い換えると、子どもたちが、「家族崩壊下の子ども」という社会的カテゴリーに帰属させられ、劣位に転化されかねない場面で、他者が自己に対してそのような扱いをする理由をどのように理解していると解釈しているのか、あるいは、そうした状況へ対処するために、自己に関する情報をどのように管理するのが適当であると考えているのかについて考察することを課題とするものである。

その意味で、本研究は、家族崩壊の問題そのものの理論的解明を目的としたものではなく、また、家族崩壊下の子どもが日常生活で会うすべての問題を実証的に解明しようとしたものでもない。むしろ、子どもにとって家族を失うことの社会的意味について、当事者の視角に焦点を当てながら解明しようとするものである。

2 本研究の視点：社会的カテゴリーの社会学的考察の発端

Kleinman (1988) は、らい病菌に感染した患者がどのようにしてハンセン氏病患者らしく感じたり、行動するようになるのかというスリランカにおける Waxler (1981) の報告を例に、周囲の人びとから何らかの反応を受けることがハンセン氏病患者となる第一段階であると指摘する。医学的に見て、ハンセン氏病患者に罹るのはらい病菌に感染した時点であるが、社会学的に見て、社会の人びとがハンセン氏病をどのようなものと考えて位置付けするのかという社会的な公準を知り、その病気に罹った人間はどのような運命を辿ることが適当であると社会が考え反応するのかを経験し、その反応が起きる前に相手の反応を予想するようになったときが、ハンセン氏病患者としてのアイデンティティが内面化される時点であると考えられる。他にも、たとえば、Goffman (1961) や Smith (1978) は、精神病者が精神病者になるのは、精神に異常を来たしたからではなく、誰かが彼を「おかしい」と告発した瞬間であって、その時点が、精神病者としての遍歴 (career) の社会学的発端であると考えた。

これと同じように、「家族崩壊下の子ども」という社会的カテゴリーを考察することが可能である。つまり、彼／女らは、家族（親）を失ったから「家族崩壊下の子ども」になったのではなく、たとえば、社会的福祉施設／サービスの介入が適当であると判断した人物が社会的に訴えたために、その社会的カテゴリーに属するようになったという視点である。この苦情人は誰でも — 場合によっては匿名の手紙でも — 構わないが、重要なのは、ここに「家族崩壊下の子ども」という社会的カテゴリーの社会学的考察の発端がおかれるということである。

たしかに、このカテゴリーに帰属する各々の子どもが、それぞれの家族との生活のなかで抱えていた問題の様態は多面多様であり、どれひとつとして同じではない。しかし、福祉機関等の社会的介入によって「家族崩壊下の子ども」と社会的に認知されれば、実際に親がいるかいないかには関係なく、「家族を失った／親のいない子ども」と見なされることになり、彼／女らが直面する生活過程やアイデンティティの変遷はいくつかの重要な点で類似してくる。そして、これらの類似点は、それぞれの家族崩壊の原因に由来するものではなく、そうした社会的カテゴリーに帰属することから派生するものであり、「家族崩壊下の子ども」というカテゴリーに付与される社会的意味の構造に支えられるものである⁽²⁾。

こうした研究視角から、本稿では、まず最初に、社会の人びとが「子どもが家族（親）をもたない」ということをどのようなものと位置付け、そうした子どもがどのような特性をもつことが適当であると考え反応するのかについて、その対象である家族（親）と暮らさない／暮らすことのでき

ない子どもの視点から明らかにする。そして次に、そうした人びとの反応に対して、彼／女らがどのような対処方法を、どのような動機のもとで選択するのかについて明らかにすることとする。

3 方法と調査概要

以上より、本研究では、「家族崩壊下の子ども」として社会的認知を受けるカテゴリーに帰属する、あるいは帰属していた子どもを研究対象に据えるため、ここでは児童養護施設への入所経験者を対象にインタビュー調査を行い、そこで得られた口述史をデータとして用いることにした。インタビューにおいて、彼／女らが使用する語彙は、自分の状態を含むもろもろの状況を説明し、他者に理解させる形に構成されている。したがって、こうした語彙を分析していくことは、ただ単に「家族崩壊下の子ども」の生活史を描出するにとどまらず、人びとが、その社会的カテゴリーに相応しいと想定する特性を取り出して、社会通念化されているさまざまな価値・規範・意識をも浮かび上がらせることにも繋がる。

生活史の聞き取り調査は、1996年7月～2000年4月にかけて断続的に行った。1回の調査時間は1.5～2時間であり、録音したものを文書化して被調査者にフィードバックし、さらにコメントをもらう方法をとっている。以下、口述を分析しながら考察を進めていく。(なお、本稿で取り上げる被調査者の属性、家族環境等は〈表1〉：最終頁を参照。)

4 「家族崩壊下の子ども」という社会的カテゴリーの性質

4.1 「特異な存在」としての自己

何よりも、当事者である家族(親)と暮らすことができない子どもにとって、それは、「平均像と違う」(事例 a) ことを意味する。たとえば、「親と生活していないという時点で、もう既に、他の人と違うじゃないですか。」(事例 1)、「やっぱり、両親がいないというのが一番にあるじゃないですか。普通の人にはいて、普通の家庭で育っているけど、自分は違うっていう。ただそれだけが嫌だったんですよ。なんか、それが恥ずかしい。」(事例 g) というように、「普通の人」である他者との比較を通して、自己の特異性を感じる事となる。そしてその特異性の原因は、次の(事例 i-1)のように、「ただ親がいないだけ」であり、したがって、自己の本性は「ごく普通」のものであると感じることになる (cf 田中1999)。

特別な感じに聞こえるんよ。どういう特別か私もよく分からないけど、特別な感じに…。別に、ごく普通なんだけど、ただ親がおらなくてみんな一緒に生活しているだけやけん。でもなんか特別な感じがする。(事例 i-1)

自己の本性は正常であって、「その立場からすれば何も変わらない、本当に普通の家庭」(事例 e-1)

であると主張するのだが、しかし、「世間の評価が、変なレッテルを貼られるからマイナス。(中略)それも俺自身が不自由に思うわけじゃない。俺の周りの人がそういう評価を下す」(事例 b) というように、周囲の人びとが、社会一般にあるイメージの「線路」にしたがって、勝手に彼らに逸脱のレッテルを貼りつけると感じている。

私は、この生活、この環境、この生育歴でやってきたから、別におかしいとか思わない。ふたり揃っていないとおかしいとか、そんなのから入ると思うんですよ。ズレとか。それがいちばんだと思います。勝手にレッテル貼って、自分が思うような線路引いて。普通、一般で言えばそうなのかも知れないけど、その立場からすれば何も変わらない。本当に普通の家庭だったんですよ。ただ周囲が勝手に『そういう家庭』と決めつけた。(事例 e-1)

こうして、周囲から付与されるレッテルによって、「普通じゃない家族」「普通じゃない子ども」という社会的アイデンティティを押し付けられていくことになる。そして、一度付与されたレッテルは、本人がいくら拒否しようとも周囲がそれを許さないの、容易に剥ぐことはできないものである。ところで、こうしたレッテルとは、いかなる性質をもつのであろうか。

4.2 「家族崩壊下の子ども」に付与されるレッテルの性質

「家族崩壊下の子ども」と認知されるとき、そこには、代表的に2つの反応が生じる。ひとつは、社会的信用の喪失であり、もうひとつは、排除と憐れみの対象となる等の劣位への転化である。以下、「親がないから、」ということばを鍵として、口述を考察しながら、家族をもたない子どもへ付与されるレッテルの性質について明らかにしたい。

4.2.1 社会的信用の喪失

現代社会において、子どもが何らかの社会的な問題を起こしたり犯罪を犯したとき、その責任を、親のしつけや育て方に求める傾向は一般的である。したがって、親がない子どもが犯罪を犯した場合、それは「仕方がない」と片付けられることになる。つまり、「親がないから」しつけがなされていないのであって、それゆえに問題行動を起こしても「仕方がない」と納得できるわけである(事例 b-1)。

たとえば、何か俺が犯罪を犯したとしようか。このとき、結局は『親がないから』ということだけでしか判断されない。そうしたことで他の人とは違う。他の人だったら、親がどうやって育ててきたか(が問題)となるけど、わたらの場合は、『まあ、そういうのも仕方ないか』と(見られる)。世間の風当たりが、他の人と違う。(事例 b-1; 括弧内は筆者加筆, 以下同様。)

「家族崩壊下の子ども」が、「親がいないから」という特性で以って人柄を判断されてしまうのは、犯罪などに限らない。たとえば、「ちゃんとできていて当たり前で、何かちょっとでも失敗したとき、『親がいないくせに』って言われる」（事例 a）というように、些細な失敗であっても、「親がいないから、（仕方がない）」と片付けられる。そして、そこにはマイナスの期待が掛かってくる（事例 e-2）。

マイナスの期待、絶対ありますよね、絶対ある。『やっぱりね』という感じで言われたりする。普通の子だってやっているのに、とかいうこともこじ付けのようにつけられることがあるから。（事例 e-2）

「普通の子だってやっている」ことであっても、こじつけのように、「親がいない」ことを原因にして、その子どもの人柄や行為が解釈される。このように、ひとたび親がいないとわかると、「接し方が変わったり」（事例 1）、「態度が変わって、陰でどう言われるかわからない」（事例 a）ことになる。

4.2.2 劣位への転化：排除と憐れみ

このように、親と暮らさない子どもは、現代社会においては常軌の逸脱とみなされるが、その属性のために、親と生活する子どもとの間に亀裂が生じることがある。たとえば、以下の口述（事例 f-1, p-1）のように、「親がいないから、いじめられ」たり、「親がいないから、嫌われ」たりすることがある。

小学生の時はいじめられました。親がおらんけんですね、『こっちに来るな』とか、そんなんありましたよ。親がおらんけんね、『おまえの親はおらんのか』って。完璧ないじめ。親がいないから。…親がいないだけで、嫌われるのは嫌われますよ。（事例 f-1）

あからさまに避けたりしたら喧嘩になりますよ。無言で避ける、でもあからさまで。（事例 p-1）

子どもにとって「親がいない」ということは、〈排除〉される社会的地位へ落とされる経験を意味する。しかし、こうした〈排除〉は、一般に人道上よくないことであると考えられており、むしろ実際は、同情される対象として〈憐れみ〉を受けることが圧倒的に多い。「親と一緒に住んでいなくて、家族の暖かさがそういうのが、子どもにとって親っていうのが大切なものだとするなら可哀想ね」（事例 c）というように、「親がいないから、かわいそう」と〈憐憫〉の対象とされるのである。

しかし、「同情されるのはされるのは、嫌ですね、惨めじゃないですか。」（事例 o）というように、「親がいないから、」と同情され憐れまれるという憐憫の対象となることは、「他者よりも劣っ

ていることを意味するので、憐憫をかけられることは卑しめられ、自尊心を傷つけられること」(Spicker 1987訳77頁)であって、当事者からすれば、「可哀想とか、同情されるのが嫌いだから、そういう風に思われるのが嫌だった」(事例g)というように、是が非でも避けたい態度なのである。

5 自己呈示における情報管理 (information management)

このように、彼らは、ひとたび「家族崩壊下の子ども」としてカテゴライズされると、対人関係に気まずさが生じたり、自己の行為・考え方に対してステレオタイプの要求が生じるなど、さまざまな面倒の対処に追われることになる。このため彼らは、自己呈示の際は、戦略を練り、自己に関する情報を管理することになる⁽³⁾。情報管理としては、「家族(親)と暮らさない子ども」という自己の情報を〈隠蔽〉する方法をとるものが多いが、積極的に〈公表〉するという対処方法を選択する局面もある。

5.1 隠 蔽

先に見たように、「親がいない子ども」には、〈排除と憐れみ〉といった「マイナスのレッテル」(事例b)が付与されることになる。しかし、彼らは、こうした扱いを不当と感じるため、「そういう風に見られたくなかったんですよね。接し方が変わるって言うじゃないですか。同情的に扱われるのも嫌だったからですね。だから言わない方がいい」(事例1)というように、「家族崩壊下の子ども」という情報を隠し、彼らが言うところの「普通の人」としてやり過ごす自己呈示を画策することがある。Goffman (1963)によってパッシング (passing) と呼ばれたこの情報管理は、しかし、些細な日常場面で脆く崩れる危険を孕む。

友だちと話していて、親の話とかなったりするやん。自分に親がおらんけんさ、そんな話についていけなかつたりするんよね。『自分とこの親、どうなん?』とか言われるけんね、もう『厳しい』としか言わんでね。なにも答えようがないけんね、『厳しい』とか言って…。(事例i-2)

このように、〈隠蔽〉という戦略をとると彼らは、家族の話題について必至に誤魔化さなければならなくなる。極端な場合、たとえば、「電話番号とか聞かれたらですね、やっぱりここ(=児童養護施設)の電話番号を言うわけじゃないですか。『電話がない』とか、そんなの恥ずかしいじゃないですか。でも言っていましたよ。そう言うしかないじゃないですか。」(事例1)というように、自宅に電話がないと言って連絡網に電話番号を書くことすら拒否する。家に電話がない恥ずかしさの方が、親と暮らしていない事実を他者に知られるよりも、まだ、心理的負担が軽いのである。

彼らが、こうして情報を隠しながら対人関係を進めるということは、いつ崩壊するかわからない

自己を不断に取り繕うということ、そして、それが崩壊して〈隠蔽〉が他者に知られたときに、さらに「うそつき」のレッテルまで付与される危惧を抱えるという点で、必然的に大きな不安と心理的負担を抱えることを意味する。それでもやはり、次の（事例 p-2）のように、噂の的になるよりは、ましだと感じる子どもも多い。

（親がいないことをどう隠すかと）色々考えますよ。色々考えるのは嫌ですよ。でもやっぱり、聞かれるよりかは、そのまま教えない方がよかった。違うかたちで広められるのも嫌じゃないですか、それぐらいなら誤魔化して。（でも）何で誤魔化さないと（いけないのか）。（事例 p-2）

しかし、こうして〈隠蔽〉作業にやっきになる反面、「何で誤魔化さないと（いけないのか）」（事例 p-2）という疑問や苦しみを抱えることにもなる。

5.2 公 表

このように、〈隠蔽〉という戦略は、結局は、自己に関する情報を隠して偽りの自己像を人びとに呈示して日常生活を過ごすということである。そこでは、常に、自己の地位を喪失・劣化させかねない情報がいつ漏れるかという不安を抱え込むことにもなる。これらは非常な心理的負担となるので、はじめから自己の立場を人びとに〈公表〉することで、〈隠蔽〉の際につきまとう暴露への不安を放棄するという自己呈示の方法をとることもある。

隠すということはしないし、逆に自分から言ってしまう。言ってしまった方が楽ですよ。言わないでいいことって言われるんですけど、やっぱり言ってしまう。やっぱりちょっとイヤかなとも思うんですけど。言った方があとは楽なんです。（事例 c-1）

言った方が楽ですよ、隠さなくていいじゃないですか。心が晴れるというかね。俺は、（児童養護）施設の内容まで教えていたんですけどね。知らないとは偏見を持ったりですね。（事例 o-1）

もうひとつ、〈公表〉という自己呈示の方法を選択する別の理由は、自己を不当な社会的地位へ落下させる偏見への対抗という動機による。上記（事例 o-1）にあるように、「家族崩壊下の子ども」は自己が差別的扱いを受けるのは、一般の人びとが「（その社会的カテゴリーの実態を）知らないから偏見を持つ」のだろうと考え、したがって、偏見を助長する〈隠蔽〉という方法ではなく、〈公表〉という方法を積極的にとるわけである。

しかしそれでも、「（たとえ面と向かって言わなくても）、気配はわかるから。やっぱりわかるじゃないですか、そういうのって。」（事例 g）というように、「親がいない自己」に対して、他者が何らかのイメージをもつ気配を完全に払拭することはできない。また、〈公表〉は、自己に付与され

かねない「マイナスのレッテル」を他者に晒して対人関係を進めることを意味するため、たとえば、「友だちに、『おまえは、お父さんとお母さんがいない』とか言われたことが中学生のときにあります。口喧嘩になってから、その時に言われましたね。『(親が) おらんのやろうが』って。」(事例 n) というように、直接的に人格を傷つけられるおそれをもつことを意味する。

口には出さないけど、やっぱり絶対何らか思っているじゃないですか。小学生ながらも。そんなこと思ったら、結構、考えるじゃないですか、自分でも…。いや、口に出しては言いませんよ。でもその先、いやあ…みたいな感じで。口には出さないけど、結構思っているんだなと思うじゃないですか。(事例 1-1)

対面状況においては、相手が自己の特異性に対して何らかの感情を抱いていることはひしひしと伝わってくるのであるが、しかし通常の社会的交渉場面では、相手の面子を潰すような発言や、感情を剥き出しにすることは社会的タブーである。そこで、表面上の会話の裏で「本当は何を考えているのだろうか」という意識が付き纏うのであるが、しかしその気持ちを対人場面であらわすことはしない。というのも、相手が自己の特異性について言及しないのは、こちらの面子を保ち尊重するためであり、対面上で緊張を来さないように配慮しているからである。したがって、こちらもそうした相手の配慮を立てなければならない。そうして(事例 1-1)のように、相互的配慮という無限背進に陥って、常に自己の特異性から逃れられないという状況に陥ることがある。相互的配慮という無限背進に陥ることは、たとえ相手は何も感じてない場面であってさえ、こちらは常に相手の腹を探るような戦略的状況に立たされることを意味する。そして、〈公表〉という自己呈示には、こうした陥穽が存在するのである。

5.3 部分的〈公表〉：腹心

このように、「家族崩壊下の子ども」が、対人場面において〈隠蔽〉や〈公表〉という自己呈示の情報管理を行うことは、それぞれが、結局は「自己の特異性」を意識せざるを得ない状況へ子どもを拘束する危険性をもつことを意味する。また、先述したように、彼らは自己の本性は「普通の人」と考えるため、〈公表〉よりも、むしろ「普通の人」としてやり過ごすことができる〈隠蔽〉という情報管理を行う方が多い。

しかし実際のところ、自分が日常的に接触する、たとえば学校の友人に対して、徹底して自己の「マイナスのレッテル」を〈隠蔽〉し続けることは、次の2つの理由より難しい。第1の理由は、先から見てきたように、他者に対して虚偽の自己を常に呈示し続けることは並々ならぬ骨折り仕事だからである。そこで、ごく親しい一部の友人にだけ自己の家族状況について打ち明けることで、その人たちを腹心に変えて、誤魔化しを講じなくてよい対人関係をもとうとする。その場合、その相手は「自分が本当に信用している、この人には言ってもいいなと思う人」(事例 i) や、ごく僅数の「信用できる人」(事例 p) に限られる。言い換えると、既に信頼関係を結ぶ下準備を整えた

相手、つまり、「家族崩壊下の子ども」という社会的カテゴリーの特性よりも自己のパーソナリティを優先して理解する可能性の高い相手のみが「告白」の対象となるのである。しかしそれでも、自己の情報の一部を隠して付き合いしてきた手前、「うそつき」のレッテルが貼られ、その後の関係が悪化するのではないかという不安は生じる（事例 p-3）。

その後のことは気にしました。その後からの付き合いがどうなるかな、とか。距離をおかれるかなとか。距離をおかれたり、また他の人に違った言い方で言われるのが嫌なんですよ。「親に捨てられた」とか。それで冷やかす人がいるじゃないですか。それが嫌だったんですね。（事例 p-3）

第2の、腹心と見なす人に自己の情報を告白する理由は道義的な問題である。仲良くなった後も、自己についての情報を隠し通すことは、その情報が人びとの信頼を失う可能性のあるものであれ、信頼関係に亀裂をもたらす原因となりかねないのである。したがって、たとえば、「その人のことを信頼できたときに言える。その人だけには言える。言った方が、向こうも信頼してくれているのに、こっちだけ隠し事をしているのも（相手に悪い）。」（事例 g）というように、他者に隠したい情報を含め、洗いざらい告白することが、友人関係における道義であり、必要な儀式なのである。それがたとえ過去の話であっても、こうした事実は、道義上、腹心には話しておくべき情報となる。

6 おわりに

以上のように、「家族崩壊下の子ども」にとって、「親がいない」というレッテルは、自己をある特殊な状況にパッケージするものである。こうしたカテゴリーやレッテルは、個々人の性格や人格よりも先に目に付くため、したがって、人びとは、この属性から逆に、その子どもの特性を類型化して、相手がどのような人間であるかを予断するようになる。

Brown の指摘するように、「いつでもどこでも、われわれは他者をそのトータルな個性の点からみることはない。他者はつねに、より一般的なもの、すなわち、大人か子どもか、労働者か専門家か、愛人か連れ合いか、といったものとして見られている。われわれは、個々の実在がもつ特殊性を抽象し、相互主観的に認知可能なカテゴリーを創出することで、その特性を標準化する。つまり、類型化するのである。」（Brown, 1987 訳31頁）。

「家族崩壊下の子ども」についても、たとえば、『あの子たちは親がいないんだ』って、そういう目で見られるのが嫌だし、そういう目で見られるのが恥ずかしい。『あの子たちは』っていう目でしか見ないじゃないですか」（事例 c）、「可哀想じゃないのに可哀想と見られるのがいや。イメージだけで可哀想と見られるのがいや」（事例 m）というように、自己の帰属する社会的カテゴリーに対して一般に語られるイメージのなかの虚像を、自己に当て嵌められてパーソナリティを予断されることを嫌うのである。したがって、「世間に流布するイメージによって作り出された虚像的要

求によって矮小化され汚損される」(Goffman 1963, 訳118頁) ことを回避しようとする。

要は変な風に考えるやん。イメージ。親がおらんとかさ。『親がおらんで、なに、どんなんしよるん?』とかさ。(事例 i-3)

外から見て、何もわからない人から『かわいそうだ』って同情されるっていうのは、やっぱり嫌だ。一緒に接していて『可哀想』と思うのと、外から『まあ、あの子たち可哀想だわ』っていうのは違うから。口先だけで、深く考えていないってわかるんですよ。特に、その目が一番嫌だと思う。あんまり考えていないで、ぽんと言ったんでしょけど。(事例 c-2)

ところでこのイメージは、上記の(事例 c-2)にあるように、「口先だけで深く考えていない」ものであり、「あまり考えないで、ぽんといえる」性質のものである。また、先に見た「親がいないから、かわいそう」「親がいないから、問題を起こしても不思議ではない」というときの「親がいないから、」ということばも、人びとが状況を吟味することなく一般に用いる〈常套句〉であり、「その状況に、慣習化されたかたちでつきまとい、その状況おける規範的な行為を暗示し、正当化するものとして機能している」(Mills 訳347頁) ものである。

このことは、実際には親がいない子どもであっても、そのことを他者に知られなければ、社会的信用を喪失したり、劣位に貶められて惨めな思いをしないですむことを意味する。つまり、「家族崩壊下の子ども」が、そうした扱いを受けるのは、「実際に親がいないから」ではなく、「親がいないと見なされたから」なのである。そこで、「家族崩壊下の子ども」という自己に関する情報を管理する方法をとるのである。

このように、彼らは、自己が〈常套句〉によるレッテル貼りをされて社会的劣位に転化されることに対して異議を感じるのであるが、しかし、その〈常套句〉自体に対して異議を唱えるわけではない。その証拠に、一般に用いられる〈常套句〉は、彼らの思考知識にも浸透しているものであるから、こうした常套句をもって、同一カテゴリー内の他者のパーソナリティを予断するという自己矛盾的言及を行うことがあり、また、自己に対して不当な扱いをする他者に対して憤るものの、相手の立場に立ってみると、自己の特異性自体は否定できずに、頷いてしまう気にさせられるのである(事例 i-4)。

陰口たたかれてたからね、聞いていた人が私に教えてくれるんよ。それで私も(文句を)言いに行つてね。我慢できんけんね、いややん、そんなの。そんなん言われて学校に行きたくないやん。陰でそんなん言われよるのにさ、表でちゃんと接してくれてるって、そんなの相当、学校も面白くないしね。みんなで面と向かって接してから(=腹を割って話すというのが)、そんなのがいいけん。でもみんな言わないけどね。なんだかんだ言って。言えんよね、やっぱ。言えることもあるけど、言えないこともあるけんね、多分。そんな気がする。(事例 i-4)

このように、彼らは「その役割のなかに当然含まれているとみなされる虚構の自己を拒否している」(Goffman 1961a, 訳115頁)のである。本論で考察したように、親と暮らすことのできない子どもが自己呈示を行う際、「家族崩壊下の子ども」という自己の情報に関する管理方法は、〈隠蔽〉〈公表〉〈部分的公表〉の3タイプに大別できる。そして、これらの情報管理の方法の性質や動機は全く異なるものであるが、しかしその共通するところは、結局、情報管理とは他者が抱く自己の印象・イメージの操作であるということである。彼らは、社会的公準を習得している上で、さらに、彼らに付与されるイメージや、イメージの中に立ち現れる虚像としての自己のパーソナリティを否定するために、その虚像である自己から距離をおくのであるが、これが、自己呈示の際の情報操作の内実なのである。

注

- (1) 家族崩壊という用語は一般的に用いられるが、その定義は定まっていない。たとえば、家族形態に焦点を当てて、いわゆる欠損家族を家族崩壊とよんだり、あるいは家族成員間の紐帯の喪失状態を家族崩壊とよんだりする。本稿では、家族形態が破綻して親と子どもと一緒に暮らすことが不可能な家族で、それを社会的に認知されているものを家族崩壊の定義としている。
- (2) したがって、同じような窮状を抱えている家族崩壊下の子どもであっても、いくつかの偶然的与件が重ならなければ、社会的に認知されない。たとえば、両親とも不在であっても暮らしに困らず、かつそれを指摘されることのない子どもは、家族崩壊下の子どもとカテゴライズされることは理論上ありえない。ここでは、子どもが家族(親)をもたないことの社会的意味を明らかにすることを課題とするため、社会に認知されていない潜在的家族崩壊は対象から外すこととする。
- (3) 情報操作といっても、子どもが情報を〈隠蔽〉することが可能になるのは、多くの場合、高校生からである。というのも、小・中学校は同じ児童養護施設の児童が複数で通ったり、あるいは通学区域に施設があることで周囲の人びとに知られやすいので、隠し通すことが難しい。しかし、高校が施設から離れている場合、児童養護施設の存在自体を知らない人が多く現状では、「親と暮らしていない子ども」という自己に関する情報を隠して、やり過ごすことも可能となる。そこで、わざわざ遠くの高校へ進学する子どももいる。

参考・引用文献

- Brown Richard 1987, 安江孝司・小林修一訳『テキストとしての社会』紀伊國屋書店, 1989
Burke Kenneth 1989, 森常治訳『象徴と社会』法政大学出版局, 1994
Goffman, Erving 1961a, *Encounters — Two Studies in the Sociology of Interaction*. 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』誠信書房, 1985

- Goffman, Erving 1961b, *Asylums — Essay on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房, 1984
- Goffman Erving 1963, *STIGMA-Notes on the management of spoiled identity*. 石黒毅訳『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, 1970
- Kleinman, Arthur 1988, *The Illness Narratives: Suffering, Healing & the Human Condition*. 江口重幸・五木田紳・上野豪志訳『病の語り：慢性の病をめぐる臨床人類学』誠信書房, 1996
- Mills Wright C. 1963, 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 1971
- Smith D. 1978, 「Kは精神病だ」山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房 1987
- Spicker Paul 1984, 西尾祐吾訳『スティグマと社会福祉』誠信書房, 1987
- 田中理絵 1999 「養護施設における子どものスティグマに関する研究」『教育社会学研究』第63巻, 東洋館出版社, pp.199-217
- 山本 泰 1993 「マイノリティと社会の再生産」『社会学評論』44 (3・20-39) : 262-281
- Waxler N. 1981, *Learning to be a lepper. In social contexts of health, illness and patient care, edited by E. michler et al., 169-94. Cambridge University Press.*

表 1 被調査者の基本的属性・家族崩壊当時の家庭状況等

事例	調査日 (居住地)	性別	年齢	学歴	職業	入所 時期	児童養護施設 以外の施設 利用経験	措置理由	家族崩壊当時の家庭状況
事例 A	1996. 11. 18 (山口県)	女	27	短大	保 母	誕生時	乳児院	養 護 放 棄	両親は未婚。病院で本児を産んだのちに失踪した。
事例 B	1996. 8. 12 (東京都)	男	23	高卒	会社員	誕生時	乳児院	養 護 放 棄	父親不明。誕生後すぐに母親が蒸発。以後、連絡なし。
事例 C	1996. 11. 12 (福岡県)	女	32	高卒	会社員	10歳	なし	母親の死亡 父親の蒸発	母親は本児が3歳時に病死。父親と暮らす が、夏休みに祖父母宅に預けられ、その間 父親が蒸発した。以後、全く連絡なし。
事例 D	1996. 8. 15 (大阪府)	男	34	中卒	自営業	8歳	他養護施設	両親の死亡	6歳時に母親が病死。父親と弟と3人で暮 らしていたが、父親が本児らと無理心中を 図った。父死亡。弟と入所。
事例 E	1996. 11. 19 (福岡県)	女	25	短大	保 母	12歳	なし	教 護	母親の精神疾患を理由に父母が離婚。父親 の病死により祖父に引き取られるが、祖父 の内縁の妻に虐待を受け家出。家出・万引 きを理由に教護入所。
事例 F	1999. 10. 30 (岡山県)	男	22	高卒	調理師	5歳	なし	父 母 離 婚 父 親 失 踪	両親の離婚後、父方に引き取られる。父親 の再婚によって継母肩虐待を受け、家出を 繰り返す(4歳時)。そしてまた離婚した結 果父方の祖母に預けられ、父親はそのまま 蒸発した。
事例 G	1999. 10. 28 (千葉県)	女	23	高卒	職 員	10歳	なし	父 母 離 婚 父 親 蒸 発	両親の離婚後、父方祖母に預けられたが、 父親はそのまま蒸発。以後、連絡なし。
事例 I	1999. 03. 18 (福岡県)	女	17		高校生	9歳	なし	両 親 失 踪	両親の失踪後、祖父母が養育してきたが、 祖母の入院によって養護措置。
事例 J	1999. 03. 22 (福岡県)	男	18		高校生	9歳	なし	父 親 蒸 発 母 親 死 亡	父親の蒸発、母親の死亡によって養護措置 となる。
事例 K	1999. 10. 28 (福岡県)	男	18		高校生	6歳	他養護施設	両 親 離 婚 父 親 蒸 発	両親の離婚後、父親と暮らす。父親の蒸 発によって祖父母が養育。祖父の入院によ って養護措置となる。
事例 L	1999. 03. 09 (福岡県)	男	18		高校生	5歳	他養護施設	養 護	両親の離婚後、父方の祖母が養育。祖母の 入院により養護措置となる。
事例 M	1999. 03. 10 (福岡県)	女	15		中校生	14歳	なし	父 親 蒸 発 母 親 死 亡	両親の離婚後、母親とふたりの生活。母親 の養育態度は悪く、養護施設入所に際して 本児から入所措置を希望した。
事例 N	2000. 04. 22 (福岡県)	男	18		高校生	誕生時	乳児院	母 親 蒸 発	母親の蒸発によって養護措置となる。
事例 O	2000. 03. 28 (福岡県)	男	18		高校生	9歳	なし	養 護	経済的困窮。
事例 P	2000. 03. 09 (福岡県)	男	18		高校生	誕生時	乳児院	養 護	両親の養育困難により養護措置となる。

()内は現在の居住地

Research on the Self-presentation of Children who have a broken family

Rie Tanaka

This paper attempts to analyze and explain the self-presentation of children that in a broken family. In particular, I focus on the feelings that these children have about themselves and about their relations with children who have a “normal” family. To understand these feelings, I examined children’s discussion of their lives, and in particular, the use and significance of certain vocabulary they used to describe their lives.

The following are results of my research.

- (1) In society, people are categorized, and the members of each category consider their own attributes as ordinary and normal. And the children who have a broken family are labeled the disgrace. This label has discrediting effect. He is reduced in our minds from a whole and usual person to a tainted, discounted one.
- (2) By definition, we believe these children is not quite human. On this assumption we exercise varieties of discrimination, if often unthinkingly, reduce his life chances.
- (3) The children who have a broken family think that their perspective is the same as other children and do not differentiate themselves from others. However, they and people around them define them as being different, which causes these children to strive for “normalcy”.
- (4) Stress management and information management are important in helping stigmatised children avoid unreasonable treatment. The very widely employed strategies of these children are passing, telling all, and speaking his bosom friends only.

These strategies have common property. Eventually, self-presentation is merely image management. These children do not identify themselves as living at an orphanage, and instead attempt to manage information about themselves when talking with others. But, in fact, image management can never serve as the means of solution.